



[第4回]

江戸から明治の交通手段、 駕籠と人力車

飛行機はおろか最近では宇宙への旅も可能な時代になりましたが、つい150年くらい前までは、人や馬などの力で動かす交通手段が主流でした。江戸や明治のころ、一番身近にあった乗り物は、時代劇でもおなじみの駕籠と、今でも浅草などの観光地で見かける人力車といえるでしょう。

駕籠は庶民から武士にいたるまで広く利用されてきました。町人が乗った町駕籠の中で、一番格式が高い駕籠が「法仙寺駕籠」、ついで「あんぼつ」、最もポピュラーだったのが「四ツ手駕籠」です。駕籠を頼むときは、神社仏閣の門前や盛り場で客待ちをした「辻駕籠」か、駕籠屋を構え、少々料金が高いがサービスのよい「宿駕籠」を利用しました。

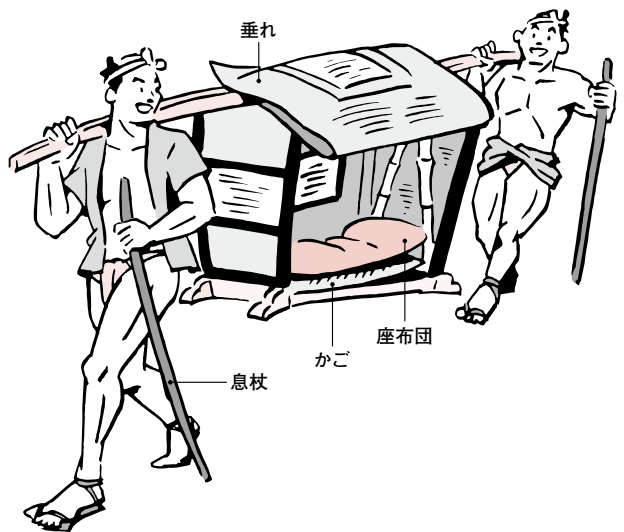
この駕籠の料金はどれくらいだったのでしょうか。

駕籠のお代はいくらだった？

江戸から昭和の交通料金

う。時代にもよりますが、天保年間（1830～43年）に日本橋から吉原まで、金二朱、いまの金額では1万円程度（注1）だったようです。しかし急がせると2倍程度まで跳ね上がりました。また幕末には相場が高騰し、吉原から麹町までで銭五貫文、いまの金額では約9万円（注2）もしたという記録もあります。このようにかなりの高額になる乗り物であったことから、庶民が使うといっても今のタクシーのように気軽に乗るものではなく、よほど特別なときに利用したようです。

ちなみに江戸から大阪まですべて駕籠を使った場合、11円96銭（明治8年）かかったという記録があります。いまのお金に換算すると約8万円くらい（注2）で、駕籠代のほか、宿泊費や食事代、それに駕籠かきへの心づけもある



ので、その費用は大きなものとなります。

さて、明治初期に登場した人力車は、日本で発明された乗り物です。その料金は、場所や年代によりさまざまですが、明治6年に定められた「人力車定則」によると、一人乗の場合、20町（1町は約109m）までは一町につき2厘5毛、21町以上1里（1里は36町、約4km）までは6銭2厘5毛、一里以上は里につき6銭2厘5毛となっています。4kmで1000円前後（注2）といったところでしょうか。人力車はこのように運賃も安く、駕籠よりもスピードが速かったため、またたく間に普及しました。幕末に東京で二万台あったといわれる駕籠は人力車の登場により姿を消します。

〈注1〉1両（＝4分＝16朱）＝約80,000円、1文＝約12円として計算。江戸時代後期と現在のお米の値段などを比較して換算していますが、何を基準にするかによって大きな差が出てくるため、あくまで目安としてお考えください。

〈注2〉明治時代初期と現在のお米の値段などを比較して換算していますが、何を基準にするかによって大きな差が出てくるため、あくまで目安としてお考えください。

その人力車も、自動車の発展とともにその役割を終え、現在は観光地で見られる程度ですが、インドなどアジアの各地では活躍中です。

自動車や電車、自動車の費用の移り変わり

では近代から現代の交通機関、自動車や電車、自動車などにかかる費用はどのように変化してきたのでしょうか。

旧国鉄の入場券を見ると、明治30年では2銭だったものが大正に入ると10銭と5倍になっていきます。その後しばらく据え置かれましたが、昭和21年以降毎年のように値上がりし、昭和41年には明治30年の10000倍の20円となります。

特急料金は明治末期の3円(400マイル、約644kmまで)から大正7年には4円(400マイルまで)、太平洋戦争中の昭和18-19年には距離に関係なく9円もしくは15円と上昇しています。昭和24年以降は、距離の細かい設定変更を繰り返すに伴い、料金も少しずつ上昇していきました。昭和39年に当時「夢の超特急」といわれた新幹線が開通し、東京-大阪間を約4時間で結びました(ひかりの場合)

さて最後は自らが運転する自動車の価格を見てみましょう。日本に初めて自動車が登場

するのは明治31年、国産のガソリン自動車が生産されたのは明治40年です。関東大震災をきっかけに自動車が増えていきますが当時は外国車が主流でした。日本の自動車メーカーが大量生産をスタートしたのは昭和10年で、この年の小型車(現・普通車)が1650円となりました。戦後にはそれが16万円と約100倍となり、翌年、翌々年には倍、さらに倍と上昇し、昭和30年には80万円となりますが、こ

の後増減を繰り返し、昭和50年代には100万円程度に落ち着きました。交通機関の発明、発達により、海外旅行までもが当たり前となり、安く・早く・遠くへ行ける現代。昔の旅の苦労は今ではまったく考えられなくなってしまうましたが、たまたまにはのんびりと普通電車で出かける旅や、散歩で遠出したりすることで、思わぬ発見があるかもしれませんね。

江戸時代の旅。そのメッカと楽しみ方

江戸時代の庶民の旅は、当初は寺社参拝が目的の信仰・巡礼の旅でした。とくに伊勢参りは一生に一度は行きたいものとされ、各地で講が結成されました。講とは互いに費用を積み立てて、毎年代参者を出して参詣させることをいいます。輪番などで代参者を選び、講を代表して護符をいただきみんなに配るといった仕組みで、大小さまざまな規模がありました。

この伊勢参りのほかにも、安産、学業成就、家内安全などを祈念した江の島詣、初代の市川団十郎が上演した「成田分身不動」にあやかった成田詣、ご来光を目指す富士詣、弥次喜多でも有名な善光寺詣、伊勢参りの後に足をのびした熊野詣、弘法大師を参詣する高野詣などさまざまな旅を楽しんでいたようです。最初は信仰を目的としたものも、時代が下るにつれて、物見遊山も大きな楽しみの一つとなっていきます。

さて伊勢参りでは一日約40～50kmを歩き、一カ月程度で往復しましたが、その旅行費用はお土産込みで4～5両、32～40万円くらい(注1)要したようです。また、旅では残してきた家族や友だちなどに連絡を取るために文(手紙)が使われましたが、それを運ぶ飛脚の料金は、寛延元年(1748年)の資料によると、江戸-大阪で書状を一通やりとりすると3分(6万円くらい(注1))もかかったようです。今のメールのやりとりを考えると、手紙ひとつでずいぶん高額ですね。だからこそ、大切なことに限定され、伝えようとする思いも強かったのでしょうか。



参考資料:「大江戸暮らし」PHP研究所、「値段の風俗史」朝日新聞社、「落語と江戸風俗」教育出版、「よここくnavi」(HP) など